

明治ノ巻 オイルシティー長岡～モノづくり産業の起こり

「東山油田」とは、長岡の東から三条にかけての一带の山地に沿って分布する産油地の総称です。

明治9年当時の油田調査では、ほとんど廃坑に近い状態にあるとされていましたが、明治20年代に入ると、浦瀬から栃尾に抜ける榎峠で手掘りにより1坑が開削されたことを皮切りに、次々と有望な油田が見つかり、石油ブームを迎えました。

東山の有力な鉱業者（小坂松五郎、植栗順平、山田又七等）が、次々に石油会社・組合を起こし活躍しました。その中の一つ大平石油は3号井の空前の大噴油により、株価が一昼夜にして一気に400倍にも上がったそうです。



宝田石油会社の東山油田鉱場



機械産業発祥の地：北部工業地帯

石油ブームの中心となった長岡市は、まさに「オイルシティー」として成長していきます。

明治20年代半ば石油採掘器具を生産すべく難波鉄工所・須藤鉄工所が設立された他、従来輸入に頼っていた石油採掘・精製機械を自製するために、明治35年には日本石油が新潟鉄工所長岡分工場を設立。39年には宝田石油などが中心となり長岡鉄工所組合を立ち上げました。

油田のピークは明治32年～明治38年頃までで、その後は下降線をたどりますが、上記の工場は一般・工作機械の製造に進出していき、現在の工業都市長岡の基となりました。

大正ノ巻 令終会思想と雪国植物園

大正5年、牧野家による長岡開府300年の記念すべき年を翌年に控えた中で、山田又七、田村文四郎ら当時の60歳を超えた人々が相集い「令終会」を結成しました。

「令終」とは「人生の終わりを全うする」の意味で、彼らは「我々はやがて死を迎えるであろうが、生れ育った長岡の次なる世代のために、何か役立つものを残そうではないか」と考えました。そこで計画して建設され、やがて長岡市に寄贈されたのが自然豊かな美しい悠久山公園でした。

令終会は募金趣意書に「人生の終わりを全うせしむるに自己の私財を善用し、未を誤ることなかれ」と訴え、当時のお金で10万円の寄付を集めました。現在のお金に換算すれば数十億円、その金額は令終会の発案がいかに多くの市民の共感を呼び賛同を得たかを物語っています。



寄付により架けられた蒼柴神社玉橋

平成8年に開園した「雪国植物園」も令終会思想に影響を受け、啓発されたことによりその設立構想が提起されました。そして、その思想に敬意を払いつつ、雪国植物園の造成維持運営組織の名称は「社団法人 平成令終会」と命名されました。

信濃川をはさんで東5キロの地点に悠久山公園があり、西5キロの地点に雪国植物園があります。市民参加型で誕生した両施設が東西等距離に立地していることは不思議な一致ですが、それを可能としたのは、令終会思想をはじめとした先人たちの尊い理念が多くの長岡市民の心の奥に宿り、共感を与え続けているからなのでしょう。



雪国植物園（長岡市宮本町3）

昭和ノ巻 戦災復興祭から長岡まつりへ

昭和20年8月1日長岡市は空襲に見舞われました。その翌年昭和21年8月1日開催された復興祭は、当時長岡商工会議所を改組した新潟県商工経済会中越支部が主催して行われました。同会支部長駒形十吉（第4代長岡商工会議所会頭）が、開会に際して寄せた挨拶文に、当時の経済人の復興に向けた並々ならぬ決意を読み取ることが出来ます。

「昭和二〇年八月一日午後一〇時二六分、焼夷弾洗礼の瞬間、思い出してもゾットする忌わしき日、あれから早くも一年の月日は流れた。此の日倒れられた人約一三〇〇名、焼失家屋一万二〇〇〇戸、これだけの大きな傷手を背負って此の一年間長岡市民は本当に七転八倒の苦しみを味わって来た。私共は今日其の一周年記念日を迎えて先ず犠牲者の身の上に思いを馳せ、その御冥福を祈る真情切々たるものを覚ゆると共に、更に遠く明治維新戦災焦土の状況をも聞き伝えに想起して、今後復興の如何に善処すべきかと日夜痛心措かざるものである。資材、資金、労力、技術、食糧等万事が極めて悪条件の中を、市民は真に悪戦苦闘して復興に努力し、伝統のネバリを発揮して来た。今の所当市の復興振りは全国有数であり、此の点誠に心強い限りであるが、裏面は血の苦しみを味わいつつあると言っても過言ではない。此の茨の道を克服して進む為に私共は此の日を復興の為の意義ある記念日とし一段の奮起精進を誓い、以て犠牲者の霊を慰めたいと考える。更に又私共は一層住み良い新長岡、理想郷長岡建設の為に戦時中解体せられた個人各商店横の連結を復活せしめ商都長岡の団結の力を発揮したいと考える。そして大いに頑張ろう。維新先輩の努力を噛みしめて進もう。以上の趣旨を以て茲に戦災一周年の記念日を卜して敢て復興祭の式典を設け附随的に各種の行事を取り行うことにした。冀くば参列各位の絶大なる御支援を賜わらんことを、一言以て開会の御挨拶と致します」

復興祭では、復興しつつあった商店など1,000余店の参加を得て、全市連合大売出しが期間中行われ、夜は夜店の出店とともに1日から10日間復興盆踊り大会が開催され、市民の好評を得ました。

昭和25年長岡市で博覧会が開かれたのを機会に名称を長岡祭に変えられ、その後昭和27年に主催者が長岡市となり現在にいたっています。

平成16年10月23日に発生した新潟県中越地震の翌年に開催された長岡まつり大花火大会で打ち上げられたのが「震災復興祈願花火フェニックス」です。

長岡まつりの原点である復興祭。その精神は今に受け継がれ、毎年8月1日～3日、慰霊の行事と共に復興と世界平和を祈る花火が打ち上げられているのです。



戦災1周年記念復興祭のチラシ



震災復興祈願花火フェニックス



今年も企業協賛で打ち上げられる長岡まつり大花火大会（8月2・3日）